

平成 25 年 9 月 15 日（日）に、長久手市役所西庁舎 3 階研修室において、第 7 回地域福祉推進のための講演会が開かれ、住民流福祉を推奨されている、住民流福祉総合研究所所長木原孝久さんのお話を聞く機会がありました。

その講演会に、市長と政策秘書課の職員も講演会とグループワークの両方に参加させていただき、後日、市長と懇談する中で、今回の講演会を通して市長が感じたことなどについて、意見交換を行いましたので、掲載します。

まず、次の 1、2 をやってみてください。

※下記 1 及び 2 は住民流福祉総合研究所資料「ご近所パワーで助け合い起こし」より抜粋

1. あなたの「おつき合い」の流儀は？

以下の項目の中で、「私もそう思う」と言えるものに○印をつけて下さい。

- (1) 自分や家族の問題は、まわりに隠しておきたい
- (2) 自分のことがご近所で噂されるのはイヤ
- (3) 人に助けを求めるのは苦手だ
- (4) 人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない
- (5) 人のことはなるべく詮索しないようにしている
- (6) 誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている
- (7) 困っている人にはお節介と言われぬ程度に関わる
- (8) 引きこもるのにも事情があるのだから、無理にこじあけるのはよくない
- (9) お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う
- (10) 隣人とは深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている

2. あなたの「助けられ上手」度は？

以下の項目の中で、「はい」と言えるものがいくつありますか？

- (1) 自分に向けられた善意は素直に受け入れる
- (2) 助けられたら「すみません」でなく「ありがとう」と言う
- (3) 自宅に他人を受け入れることに抵抗がない
- (4) 「私は認知症」「息子が精神障害」などと周りの人に言える
- (5) さびしい時は「さびしい！」と声を上げられる
- (6) 気軽に「助けて！」と言える相手を見つけてある
- (7) 頼りになる世話焼きさんをつかまえてある
- (8) 今のうちにたくさん、人に尽くしておこうと思っている
- (9) 助け合いを目的としたグループに加入している
- (10) 所属している趣味グループや老人会で助け合いを仕掛けている

「助けられ上手」になろう

あなたはいくつ〇（マル）がつかいましたか。

1については、〇（マル）が多く、2については、〇（マル）がつかない結果になった方が多いのではないのでしょうか。それが、ごくふつうの結果だと思います。

日本は、経済が発展すると同時に、核家族化が進み、昔のような密接な近所づきあいが薄れてきたように感じます。ご近所さんとの関係もあまり深入りしないものになり、個人情報保護がうたわれるようになってからは、特に「よそ様」のことは詮索すること自体が非常識のように思われてきました。

しかし、これからのまちづくりには、昔のムラ社会であった日本の良き田舎のように、ご近所さんみんながお互いのことを気に掛けあって、良い意味でお節介を焼くことが、住民同士の絆を取り戻すうえで非常に大切なことなのです。

今回、木原さんのお話を聞いて、お節介であることは、将来、長久手市が直面する高齢化社会問題、福祉問題に絶対に必要な住民意識であると強く思いました。

世の中はいま、福祉サービスに限らず、ちょっとしたことでもお金を出せばなんでも業者にやらしてもらえる時代で、先ほども述べた社会の流れから、共助（注1）の力がとても弱まってきています。木原さんは、この共助の力を強く



するために、まずは自助（注2）を元気にしましょうと提案されました。

今後、人口が減り、山の上から麓へ降りていく時代の中で、高齢化社会の様々な問題が発生するであろう

（写真：木原さんの講演会で。〇（マル）がついた方は手を上げて～！）

ことは以前からお話させていただいていますが、あまりピンとこないという方がほとんどでした。

木原さんは、「だれもが何らかの福祉問題を抱えている当事者です。その自覚が欠けているために、問題を抱えていることを隠したり、支援を求めず引きこもったりすることは、それだけで担い手がやりにくくなります。福祉がうまくいくには、当事者が『助けられ上手』でなくてはなりません。」とおっしゃっています。

自分のことを地域で話してみよう

みなさんが私の言っていることがわからないと言われるのは、やはり、この当事者意識が欠けているからなのだと思います。しかし、それは何も悪いことではありません。

豊かな時代の中では、福祉問題は、遠く、自分とは関係ないことのように感じて当たり前のことです。しかし、これからは今までと同じ豊かな社会ではいられないのです。ですから、少しでも、住民の方たちも、市の職員も「(いずれ、もしくは現在も) 自分も福祉の主役である」という、当事者意識を今から持って活動して行って欲しいのです。

そもそも、あいさつをして顔見知りになっても、他者に自分のことを詮索されたくないという意識が強ければ、あいさつをするだけの顔見知りで終わってしまいます。これからの長久手市の将来のためには、みなさんがもう一步、自分のことを相手に伝えるように踏み出す「住民流福祉」の価値観に変換していただきたいのです。

もし今、何か小さいことでもいいので、困っていることがあったら、子どもの習い事で仲良くなったお母さん同士、趣味の仲間や、いつも道であいさつする地域の人と少しだけ話をしてみてください。同じ悩みを抱えている人がいて、どんどん繋がって行って、何か解決の糸口が見つかるかもしれません。行政や

事業者のサービスにすぐに頼るのではなく、これからは自分たちで助け合う「助けられ上手さん」（注3）になっていてほしいのです。木原さんいわく「日本人の大部分が助けられ下手さん」とおっしゃっていましたが、本当にそのとおりだと感じました。

私のところには、日々、住民のみなさんから様々なご意見や提案が寄せられます。行政へは自分の悩みを赤裸々に打ち明けられても、家族や近しい友人、ましてご近所さんには絶対に相談しない、だから行政で今すぐ、何とかして欲しい！と悩みを寄せられる方が多いように感じます。



(写真:グループワークを終えて。チームのまとめ講評の様子)

「人様に迷惑を掛けよ」の精神で

長久手市には仕事をリタイヤされ、でも、まだまだ人のために働きたいと思われている、知識と経験が豊富にある人生の先輩方がたくさんいらっしゃいます。そういった方たちにも、ぜひ地域の世話焼き役やお節介役をお願いしたいと思います。地域の手がたくさんつながることで、行政だけでは行き届かない細やかな地域の目配り気配りで、不幸な事故や、孤立死、地域にたくさんある問題もなんらかの形で少しずつ解決できるようになるのではないかと、今回の講演会を聞いて強く思いました。

「人様に迷惑をかけるな」これは、誰しもが一度は親に言われた言葉だと思います。ですが、これから地域のみなさんがもう一度自分たちでまちづくりをするとき、ぜひ、恥ずかしがらずに「人様に迷惑を掛けよ」の精神で「困って

いる。助けてほしい」と声を上げて欲しいのです。

木原さんのお話の中で、ご高齢で体が自由に動かず、人にいつもお願いをして、毎日「ありがとう」「すみません」を繰り返すばかりの方が、あるとき「もう、人に謝ってばかりで疲れた。自分も誰かに頼られたい」と言うような話をされたという事例がありました。これは、とても素直な感情だと思います。そして、これがまちづくりに必要な気持ちだと思うのです。誰にでもたつせがある、だれにでも居場所がある、とても大切なことです。

これからは、今、自分の中にある様々な常識を一度全部ひっくり返して、地域の問題に自分たちで取り組む仕組みを住民のみなさんと行政で作っていきたいと思います。一緒にまちづくりを進めていくために、ぜひ誰もが「助けられ上手さん」になって欲しいと思います。

(注1)「共助」とは

たすけあいのこと。地域住民同士の助け合い活動。

(注2)「自助」とは

自分の命を守る当事者の努力のこと。

(注3)「助けられ上手さん」とは

自分自身、福祉問題を抱えているという自覚を持ち、問題を抱えることは恥ずかしいことではないと理解したうえで、周りに問題をオープンにして支援を求めることの出来る人のこと。



●本気で助け合いを始めるために

新しいおつき合いのすすめ

- (1)自分の抱えた問題を、まわりに打ち明けよう。
- (2)困った時は、思い切って「助けて!」と言おう。

- (3)助け合うため、あえて詮索好きになろう。
- (4)気になる人には、お節介と言われても関わろう。

- (5)隣人知人とは、迷惑をかけ合える関係になろう。
- (6)プライバシーを守るより、人を救うことを優先しよう。



～職員のご感想～

私は、今回の講演会とワークショップに参加してみて、考えたこともなかった大切なことが次々と出てきて、改めてお互いを知りあう、住民福祉の大切さを学びました。「お節介」が「思いやり」と同じ意味を持つような住民福祉が育つように、努力していきたいと思います。